

講演「茶会記にみる

酒井宗雅の茶道具」

橘 倫子(茶道資料館学芸員)

講演日・平成二十四年十月二〇日

まず、酒井宗雅と展覧会に登場する人物について、関連する出品作品をスライドで提示しながらお話した



写真1 酒井宗雅夫妻肖像画
仲野永秀筆 姫路城管理事務所蔵

後に、本題に入っていきたいと思う。

酒井宗雅夫妻の肖像画（姫路城管理事務所蔵）から見ていただが、男性が酒井宗雅で、向き合っている女性が奥さんの嘉代姫である。宗雅は本名が忠以、一七五五年から九〇年まで、ちょうど江戸時代中期を生きた人物である。安永元年（一七七二）、十八歳の時に祖父の忠恭が亡くなり、姫路藩主を継ぐ。既に父親は没していたので、祖父から

孫へと代を継ぐことになった。寛政二年（一七九〇）、三十六歳の若さで亡くなったが、日記を二種類残しており、それをもとにして、今回の展覧会を企画させていただいた。

江戸時代に大老を務めた家は四つあり、酒井家はその一つに当たる。本家筋に当たるのが雅楽頭家（うたのかみけ）と左衛門尉家（さえもんじょうけ）で、宗雅は雅楽頭家の出身である。また、宗雅の母親は大給松平家の出身である。大給松平家は、裏千家とも所縁の深い家で、裏千家十一代家元・玄々齋が大給松平家の分家から千家に入っている。

実弟は江戸琳派の絵師、酒井抱一であるが、抱一との合筆である「夢図」（姫路神社蔵）は、蝶を抱一が描いて、横たわった「夢」の字を宗雅が書いている。この題材は「胡蝶の夢」という中国の古い説話から採られていて、うたた寝をする主人公の男性を「夢」という字に置き換えて横たえるという、大変面白い構図

で描かれている。

母方の曾祖父は大給松平乗色で、『茶器名物集』（『三冊名物記』ともいう）を記している。また、宗雅には特に親しい二人の叔父がいる。叔母の夫に当たる岡山藩主・池田治政と、宗雅の母方の叔父・大給松平乗完である。兩人とも宗雅と年齢が近く、茶会をはじめ、蹴鞠、歌会、お香の会等様々な席で同席している。

宗雅は石州流の中でも特に松平不昧に師事し、「式得庵」という庵号を不昧からもらっている。唐物肩衝茶入「富士山」（現湯木美術館蔵）は、宗雅が不昧の茶会に招かれた折に、熟覧をさせてもらった茶入の一つである。現在、茶会に用いた道具

は最後に拝見という形で熟覧をする機会があるが、茶会に用いなかった所蔵品を席中で拝見する機会は少ない。しかし、十八世紀半ばの様子を見ると、亭主が所蔵している道具で茶会には登場しなかった道具を客人は茶会の最後に所望して拝見させてもらっている。当時、美術館も展覧会もない中で、茶会は各家が所蔵している名物道具を拝見する機会でもあり、それが茶会の楽しみの一つであったようだ。以上、出品作品の紹介と共に、ざっと展覧会や日記に登場する人たちを紹介した。

さて、宗雅が残した日記の内、一

つは『逾好日記』という茶会の記録で、三十三歳から三十五歳まで、三年間の茶会記である。もう一つは、二十二歳から三十六歳、亡くなる直前まで書き続けられた日次記の『玄武日記』で、一つ書きでその日一日あったことが書き留められている。『逾好日記』は茶会記にかかわる大変重要なこと、細かいことまで書かれているが、晩年に近い時期の、たった三年分しかない。これに対して、『玄武日記』は、茶会以外のことも沢山書いてあるが、二十二歳の頃から亡くなる直前まで、宗雅が茶の湯にどのよう傾倒していったのかといった長期的な分析もできる。

『玄武日記』の内、二十二歳（安永五年（一七七六））頃は、茶会とはつきりわかるものは二件ぐらいしかない。それが、天明四年（一七八四）には百二十件の茶会が確認できる。これだけ多くの茶会が日次記に出てくるようになると、見易くするため、日次記の中から茶会の記録だけを抜き出して別に綴じるようになる。その後、逾好庵という茶室が完成したのを機に『逾好日記』に名称も変わったのではないかと思う。まず、『逾好日記』の冒頭を紹介する。最初に、日にちと場所が書か

れているが、「正月、逾好庵」とある。正月から二月半ば頃までは新年の初釜に当たる茶会ということ、冒頭で道具組をほぼ決めていた。その道具組とは異なる道具を出した時だけ、それを追加して書き留めている。正月三日には、松平出羽守（不昧）を正客に招いて茶会をしているが、道具組は既に冒頭で書いている

ので、三日の記録は懐石料理から始まっている。

「逾好日記」には、自分が亭主として催した茶会の記録（自会記）と、客として招かれた茶会の記録（他会記）の両方が混在しているが、特に印象に残ったものは絵を添えながら、感想も書いている。松平相模守（因州鳥取藩主・池田治道）の茶会（写真2）では、最後

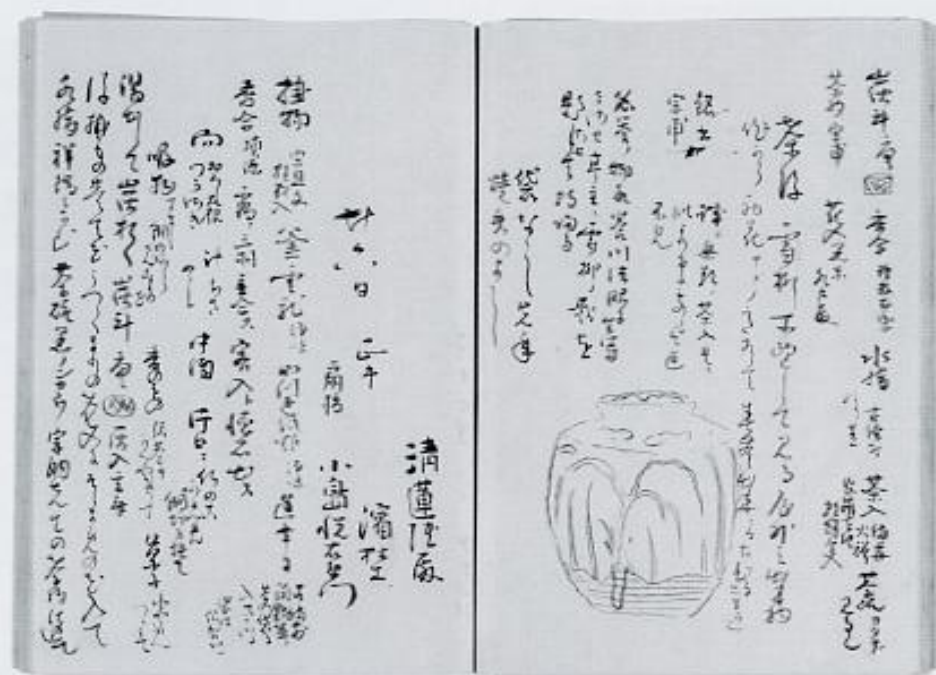


写真2 『逾好日記』天明八年三月二十五日の条（右）

後に「雪柳所望して見る」とあり、雪柳の茶入（現根津美術館蔵）を熟覧している。「存外之出来物」「誠ニ無類ノ茶入、是ニ似よりたるものも是迄不見」と書いてあり、これと似たものを見たことがないと、大変感動して雪柳の茶入の絵を描いている。日記の中には、こうしたラフ画が多く描かれている。

次に、この熟覧の返礼の茶会を紹介する。日記には「雪柳ノ返茶故如此」とある。雪柳の茶入を松平相模守のお宅で見せてもらったお礼に、今度は宗雅が相模守を招いて茶会をしている。その際に茶入を使うことは遠慮して、濃茶に茶入ではなく濃を使っている。色々な細かいところまで心配りをした返礼の茶会であることがわかる。

さらに、別の日の日記には、「染井」という親しい友人よりお菓子が届いたことが記されている。宗雅は早速、床に利休の文を掛け、「道庫（洞庫）」の上の棚に名物の蟹の蓋置を一つ置いて、桶の茶碗（現出光美術館蔵）でお茶を楽しんでいる。名物の蟹の蓋置と桶の茶碗、この二つをその日の日記と一緒に現在展示している。

今回の出品作品の中には、宗雅が手づくりした赤楽茶碗があるが、不昧からもらった「式得庵」という庵号の印が押してある。日記の中には、赤楽の茶碗を自分で作ったところ、いい出来であったので、「桶の実」という名前を付けて、茶道具の中に入れておくという記載もある。必ずしも日記に記されたものと同じ茶碗ではないかもしれないが、このような楽茶碗を得意として幾つか作っていたのかもしれない。高台周辺のヘラ目が大変力強く入っており、風雅を好んだと言われる酒井宗雅であるが、武家としての力強さも、こちらの茶碗は併せ持っている。

同じく出品作品に「即色」という

名前の瀬戸焼の茶入（現根津美術館蔵）があるが、これは酒井宗雅が所持していたものである。「逾好日記」の天明七年正月七日の項に、「即色之茶入、所望二付出之」と書いてあり、客人より即色の茶入の所望があったので、茶会に使用したことが書かれている。

また、宗雅が亡くなり、十三回忌が終わった後に、宗雅所蔵の茶道具が百二十点ほど松平不昧に譲渡されたが、その中の一つにあたる。百二十点ほどが十回にわけて譲渡されているが、その一回目の覚書の中に出てくる。しかも、譲渡された道具のうち三点は実際には宗雅の十七回忌まで酒井家にとどめ置かれたと言われているが、その三点の一つである。

「即色」という名前は般若心経から採られており、仏事にふさわしい茶入だったということから十七回忌まで置かれていたのではないかと考えられる。もう一つの理由として、宗雅は藩主になってから四回、国許の姫路に帰っているが、その四回目に帰った時（亡くなる二年前）に、口切の茶事を姫路でしており、その際にこの茶入が使われている。それ故、四回目の国入りの際に、江戸から姫路に持ち帰った道具の一つで、国許の家臣たちに振る舞った最後の茶会が、この茶入を使った茶会だったと考えられる。

次に、天下三舟の一つと言われる「松本船」という釣花入（現泉屋博古館分館蔵）も、宗雅が所持しており、やはり客人より所望があった。「松本舟所望に付、朝茶催候」と日記（写真3）にある。松本船の所望があったので、わざわざ朝茶をしている。ここ（日記）に松本船の絵が描いてあるが、朝顔の花が一輪入っ

ていて、葉っぱが二枚ついている。ここに「瑠璃葬花一輪 葉二ツ如図入ル」と書かれている。「花を遠く入候とて、是三賞美被致候」とあり、瑠璃色の朝顔を一輪入れている。所望があった松本船にわざわざ朝顔を一輪入れるために朝茶事にしたのであるが、その際に朝顔の入れ方にも

こだわり、朝顔をまつすぐ上に立てて葉っぱを手前に持つてきた。それを客で来ていた是三が大変ほめてくれたということで、自ら活けた朝顔が入っている松本船を絵に描いている。

酒井宗雅の偉大な功績として、もう一つ紹介しておかなければならないことがある。それは、天明八年の「逾好日記」に出てくるのであるが、滝本坊の松花堂昭乗由来の什物であった茶道具類が散逸する危機にあり、宗雅が私財を投入して買い戻し、滝本坊に寄贈した事である。全部で二十四点を買戻した。その二十四点が日記にも書きとめられている。

そのうちの三点は、逆に滝本坊からお礼として宗雅に贈られており、その中の一つが備前茶入「さび助」である。酒井宗雅の偉業に対して贈られた重要な茶入である。

同様に、酒井宗雅が滝本坊のために買い戻した道具の一つに有馬筆の香合がある。有馬筆とは何か存じ

だらうか。有馬温泉の土産で、筆の尻部に仕組まれた小さな人形が筆を持つと筆管から飛び出るようになって細工筆である。この香合は、摘みの部分に小さな人形がついており、それが有馬筆の人形と大変よく似ているので、有馬筆香合と名前がついている。

さらに、松花堂画寄合賛絵巻も二十四点の中の一つである。松花堂が絵を描いて、そこに色々な人が賛を添えた画賛二十四枚を巻き物に仕立てたものであるが、

今回これの写しが出品されている。本歌の巻物は、昭和になって一枚ずつに裁断されてしまい、散逸してしまつた。その中で、写しは当時の原形をとどめているものであるから、こちらの写しを今回紹介している。二十四枚の中には、先に宗雅と抱一の合筆作品として紹介した「夢図」と、ほぼ同じ構図の「夢図」も含ま

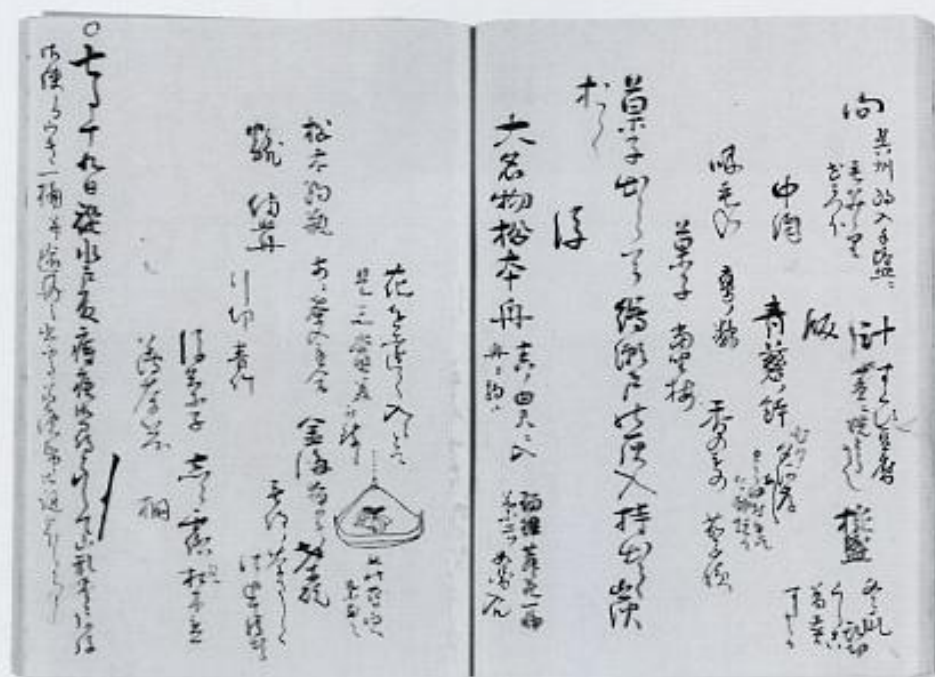


写真3 「逾好日記」天明八年七月一日の条

れている。松花堂画の「夢図」は、蝶が二匹で、「夢」の字はまつすぐ立っているが、ほぼ同じ構図である。宗雅が買い戻した経緯から考えて、この画賛を目にしていたと思われる。宗雅と抱一の合筆作品への、松花堂画の「夢図」からの影響が考えられる。

最後に紹介させていただいたのが、松平不昧との往復書簡の掛物であるが、松平不昧と宗雅との関係は、かなり早くからあったように言われてきたが、『玄武日記』から見えてくると、天明四年（一七八四）頃、日記に記載される茶会の回数が百二十回にも及ぶ頃から、不昧の名前も確認でき、不昧との付き合いも密接になっていったと思われる。今回は、不昧との往復書簡をかなり沢山出させていただいた。往復書簡の多くは、宗雅が点前や茶道具、茶室について不昧に質問をし、不昧がその質問状に朱書で返答を書き込んでいるものである。これは宗雅と不昧の往復書簡の中でも有名なもので、文末には紋付の正装をした宗雅が手をつけて頭を下げておじぎをしている自画像が描かれている。背中には家紋の剣片喰紋が描かれている。

以上、出品作品を中心にしながら、日記の中にどのように書かれているか、ということも合わせて紹介した。